

書 評

柳父圀近著

『日本的プロテスタンティズムの政治思想
——無教会における国家と宗教——』

新教出版社 2016年1月

四六判 387頁 3,800円＋税

渡 部 和 隆

本書は内村鑑三の政治思想と彼の弟子である三人の社会学者、南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄の政治思想とを、キリスト教信仰との関係という観点から分析したものである。具体的には、内村の「福音信仰に依りつつ『歴史と社会』を見る眼差し」（383）が対象とされ、さらに内村の眼差しが南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄にどういう形で継承されたのか、また彼らの継承にはどのような意義があるのかを論じている。筆者によれば、無教会の精神史は「『近代日本』の政治思想史の最も重要な遺産の一つ」（384）であり、「これらの人々の一〇〇年にわたる『思想の伝統』の研究は、結果として日本の近代についてもいろいろ気付かせてくれる」（384）という。目次の概略を示すと、以下の通りである。

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 内村鑑三にとってのクロムウェル | —— 無教会の政治思想 |
| 2. テーマとしての「国家と宗教」 | —— 内村鑑三・南原繁・大塚久雄 |
| 3. 国家・教会・無教会 | —— 南原繁とカール・バルト |
| 4. 社会科学と国家の理想 | —— 矢内原忠雄の学問と信仰 |
| 5. 帝国主義とファシズム批判 | —— 矢内原忠雄の預言者的精神 |
| 6. 「エートス」と「ネーション形成」 | —— 大塚久雄の史眼と福音理解 |
- あとがき

分量的には、第一章と第二章とが合わせて半分以上を占めており、第四章が最も少なくなっている。全体的には、マックス・ウェーバーやトレルチ、ティリッヒの類型論や枠組みを

利用しつつ、無教会キリスト教がどのような社会の中でどのような政治思想を形成、継承、発展させていったかが論じられている。第一章において、クロムウェル理解という切り口から内村の信仰と政治思想の生成、変化、発展を分析し、第二章において、それを「天皇の神格化」批判と日本というネーションのエートス形成という二つの問題意識に定式化して、同じ問題意識が南原や大塚にも見られることを指摘する。内村から継承した二つの問題意識を、南原は西洋政治思想史の研究という場において、大塚は近代イギリスの経済史や宗教社会史の研究という場において、それぞれ深めていったのである。第三章においては、南原繁が当時の日本では最も的確にカール・バルトの政治思想を理解していたことを指摘した上で、両者の関係を「交叉」（244）と見なす作業仮説を提示し、南原とバルトとの間の類似点と相違点とを分析している。第四章と第五章においては、新たに矢内原忠雄が取り上げられている。特に第五章では、矢内原の「福音における預言」（295）や「社会科学の神学」（327）、矢内原の植民政策学の理論的骨子や天皇制に対する矢内原の態度の問題が重点的に分析されている。第六章においては、再び大塚久雄がテーマとなり、大塚の福音理解が取り上げられた後、それが大塚の学問に対する姿勢や近代日本の現実に対する批判的意識に反映されているという分析が展開されている。

このように、本書の内容は多岐にわたっており、紙幅の都合上、その全てを紹介するわけにはいかない。興味のある方には本書を直接、読むことをお勧めする。本書評では、内村から三人の社会学者たちに継承された問題群について紹介し、扱われる様々な主題に関しては簡単に触れるにとどめておくこととする。

第一章は、分量の点からみても内容の点からみても、本書の白眉である。内容は内村のクロムウェル理解を時代順に追っていくというものであり、その作業を通して、クロムウェルのようなピューリタンが生み出した近代的な政治思想や政治制度が内村の思想全体のなかでどのように位置付けられていたかが明らかにされている。筆者は時系列順に内村のクロムウェル像を追っていくことで、西郷隆盛像などの関連する多くの問題を丁寧に扱っているが、ここでは全てを紹介するわけにはいかないため、複数ある議論の中からいくつかを扱うにとどめておく。

まず、内村がアマースト大学で歴史学の教授モースの講義を受ける中でドイツ観念論風のヘーゲル的な歴史観を習得し、神の摂理としての歴史的個性と伝統の観点から国家を考えるようになっていった過程が緻密に分析されている。これは一見すると、クロムウェルのピューリタン革命がもたらした近代的な政治思想からは相当に隔たりのある議論である。実際、本書でもクロムウェルが内村に与えた感銘というのは、不敬事件の頃までは被造物神化の拒否という点しかなく、政治思想に関してはむしろ、「理論の精粗の大きな差を無視すれば、ヘーゲルも内村も共通して、『社会契約論』の国家論を拒否したところが似ています」

（31）と指摘されている。「アメリカに遊学して、その『近代市民社会』のプラス（公共性にかかれた個人）と、そのマイナス（資本主義化の人間疎外、彼の言うマモニズム）を、日

本の伝統社会のプラスとマイナスとの比較に於いて経験することの出来た内村は、まさに『歴史主義者』として成長した面があります」（98）と筆者は述べ、「後発日本が、欧米近代のプラス面を継承しつつ、そのマイナス面をどのようにして克服しうるか、という彼の壮大な問題意識」（99）にそれがよく表れているという。

しかし、それにもかかわらず、内村はクロムウェルのピューリタン革命が打ち立て、また内村自身がアメリカ留学で実際に体験したところの近代的な市民社会の価値を認めていた。続く日清戦争後のジャーナリスト時代には、内村は近代主義的な立場から日本社会の前近代的な性格を鋭く批判した。筆者はティリッヒの枠組みや類型論を使いながら、内村の政治的発言のスタイルが、国や国民のもつ神聖な由来や神の祝福をもっぱら語って国の現実政策を無批判に肯定する「祭司的」なスタイルから、普遍主義的倫理から国と国民に神の裁きを伝えて不当な政策の変更を促す「預言者的」なスタイルに変わっていったと指摘する。この内村の「預言者的」なスタイルのなかに、一七世紀以降のイギリスやアメリカの自由のエートスを生み出した存在としてのクロムウェルが登場している。クロムウェルとその遺産は近代的自由の政治思想を生み出したものとして、以前よりも大きな文脈のなかで把握され、内村が未だに前近代的なエートスに覆われている日本社会や藩閥政府を批判して近代的で普遍的なエートスを新しく日本にもたらそうとする際に登場するようになるのである。つまり、ジャーナリスト時代の内村は「『近代的立憲制』とそれに関連する政治制度・政治思想の意義と、『英米』的な市民社会を支える心性の大切さを、初期よりもはるかに重視する」（57）のであり、この立場からクロムウェルの業績と思想とが高く評価されていたのである。この時期の内村が提示した近代的な思想は、筆者の手によってウェーバーのピューリタン革命に関する研究を用いて分析され、「不思議なほどに、イギリス・ピューリタニズムの職業倫理に関するドイツの碩学の分析にピタリと符合しています」（47）とされている。

重要なのは、ジャーナリスト時代に続く日露戦争や第一次世界大戦の後の時期になっても、クロムウェルに対する高い評価は「その限りでは」（58）基本的には変わらなかったという筆者の指摘である。ここまでの議論から分かるのは、筆者は必ずしも明示していないが、内村の政治思想には、アングロサクソン由来の近代的な政治思想とそれ以外の思想とが流れ込んで矛盾対立を孕んだまま保持されており、その状態が最後まで続いていったということである。この矛盾対立を孕んだままの状態が、時代の変遷や内村の思想の展開とともに、複雑な陰影を帯びるようになっていく。内村研究にとってはこの陰影の方が重要である。まず、日露戦争の時期からクロムウェルは非戦論との関係で批判されるようになり、さらに第一次世界大戦後においては、内村が進歩史観の歴史哲学を捨ててキリストの再臨のみを待ち望む終末論的な信仰を新しく獲得した結果、近代人の自我中心主義を否定する原理的な近代批判が展開されるようになり、近代主義的な思想と反近代主義的な思想との矛盾対立が先鋭化していった。そのためか、晩年の内村には保守的な現世逃避の傾向があり、それは先行研究でもしばしば問題にされているところである。本書でも、この問題は時に「肝心の

日本の現実を凝視することには失敗していたと言わざるをえないでしょう」（71）と批判的に扱われている。晩年の内村に対し、列王記解釈において王政の意義を説いて天皇制につなげて論じているのを筆者は問題にしている。しかし、上記の否定的な見解も持つようになったにもかかわらず、内村は最後までクロムウェルの遺産を捨てることなく、近代主義的な政治思想を保持し続けたと筆者は結論づけている。筆者は具体的には内村のローマ書十三章解釈の分析を通してこの結論を導き出している。確かに内村はローマ書十三章解釈においてはクロムウェルのように暴力によって革命を起こすことを非難しているが、しかし、ガンディーの非暴力不服従の革命は高く評価しており、そうすることで、「当時としてはむしろ相当ラディカルな政治思想を述べている」（69）と筆者は結論づけている。筆者はここから「a 内村が執拗な非暴力抵抗という論理を説いたことと、b これを受けて門下の社会学者たちが、執拗に日本の政治・経済の現実への批判的言論を実践したことに注目したい」（118）と述べ、次の章の議論につなげていく。

第二章では、内村の政治思想は天皇神格化を拒否するという問題意識とキリスト教によって日本というネーションに新たなエートスを形成するという問題意識との二つに整理される。特に後者のネーションをめぐる内村の問題意識は、「日本人は（イ）西洋の歴史という『特殊』の枠を超えて『原始キリスト教』に遡り、そこで、直接に『普遍』としての福音に出会う必要がある、と考えると同時に、（ロ）日本人が福音を『西洋的教会の伝統』という『特殊性』から解き放すことができた場合には、あらためて福音の『普遍性』が日本から世界に輝きわたることにもなり得る」（138）ということであり、「とくに儒教、仏教がはぐくんできた日本人の心性の伝統（宗教的感受性や、恭順と温情、節操と誠実のエートスなど）を生かしつつも、日本人が、福音という『普遍』を受容して、普遍的精神に開かれた未来のネーションへ成長する」（140）ということである。いわば、「『未来のネーション』のヴィジョンを追求するが故の問題意識」（140）であり、新たな国家として出発した日本のネーションのエートスをキリスト教によって高めていくという発想であった。筆者はこのように整理した上で、内村の問題意識には「デリケートな問題」（140）もあったと指摘している。それは内村が時に神の国を江戸時代の名君治下の藩のイメージで語り、それを天皇制にまで広げて考えていることである。確かに、内村は晩年まで天皇の神格化は拒否しているが、他方で、先ほども言及した列王記の講義を通して分かるように、家族国家という明治国家のイデオロギーに継承されたところの保守的な政治思想も維持されていた。この「デリケートな問題」も含めて、内村の問題意識は南原や大塚にも継承されていくこととなった。ここでは南原は扱わず、大塚を中心的に取り上げることとする。

大塚の場合、内村の問題群は少し形を変えて継承されることとなった。第六章の議論とも若干重なってくるが、大塚は価値自由な認識姿勢が求められる社会学者であって、自分の信仰と社会科学的認識との峻別を貫いているはずである。しかし、筆者は大塚史学の最深部を規定する問題意識や批判意識のなかに、「国家と宗教」をめぐる内村からの問題意識の継

承を見てとるのである。具体的には、福音による日本のネーションのエートス形成への寄与という内村の問題意識は「イギリスやニューイングランドにおける、『ネーション形成』を担ったピューリタン・エートスの研究」（182）となり、天皇の神格化拒否は「『王権神授説』をもって非国教徒を弾圧したイギリス絶対王政と、ピューリタニズムの対立の分析」（182）となった。大塚においては内村の問題意識は「イギリス近代の経済史と宗教社会史を素材としたネーション論、中産的生産者層のエートス論」（188）という形で継承されており、その結果、大塚の学問的な業績は「内村の『理想の日本』論や、内村の『国民主義』を実現しようとすれば、どのような歴史的・社会的・そして思想的条件が必要なのか、というリアルな問題を考えさせるもの」（188）になった。それは大塚における天皇の神格化拒否の問題意識、すなわち天皇制国家を支えた「『疑似血縁共同体』のエートス、とそれに関する『血縁のマギー』」（355）からの人々の解放と、それに代わる新たなエートスとしての「『近代的人間類型の確立』の緊要性」（188）という問題意識につながっていったのである。

（182）となった。大塚においては内村の問題意識は「イギリス近代の経済史と宗教社会史を素材としたネーション論、中産的生産者層のエートス論」（188）という形で継承されており、その結果、大塚の学問的な業績は「内村の『理想の日本』論や、内村の『国民主義』を実現しようとすれば、どのような歴史的・社会的・そして思想的条件が必要なのか、というリアルな問題を考えさせるもの」（188）になった。それは大塚における天皇の神格化拒否の問題意識、すなわち天皇制国家を支えた「『疑似血縁共同体』のエートス、とそれに関する『血縁のマギー』」（355）からの人々の解放と、それに代わる新たなエートスとしての「『近代的人間類型の確立』の緊要性」（188）という問題意識につながっていったのである。

もっとも、内村と大塚の違いも指摘されている。大塚の「『近代的人間類型の確立』の緊要性」という議論は、内村に残っていた「デリケートな問題」に対して異なる解答を与えている。内村の場合は晩年になっても天皇に対する敬意を一定程度認めていたが、大塚の場合は「『天皇の赤子』である思想ないし、『下意识の意識』をも、大塚が原理上、それは一種の『魔術Zauber』だと見て拒否している」（195）と指摘されている。社会契約論についても、「とくにロックの社会契約論のような論理であれば、決して拒否しなかったと思われます」（196）と筆者は言う。内村と大塚とでは、確かに問題意識は継承されているものの、世代の違いからか、政治意識のメンタリティーが大きく異なっていたと指摘されている。

第三章以下でも南原、矢内原、大塚について興味深い議論がなされているが、紙幅の都合上、全てを扱うわけにはいかない。ただ、評者にとって興味深かったのは、筆者が無教会の思想史から汲み取った叢智を未来に向けてどのように生かすかという点について、筆者自身の考えが断片的に示されていることである。例えば、筆者は「矢内原の『実質的植民』の概論は、これを新たに『国民経済』の概念へと組み立て直し、『ドミニオン論』は『国民国家論』へととらえなおす作業」（320）が必要だと指摘し、「ある意味で、矢内原の残した問題をそうした脈絡で継承しつつ、新たに『国民経済の自立』の問題を理論化したのは、内村門下の後輩大塚久雄であった」（320）として「矢内原と大塚の理論をクロスさせつつ、日本とアジアを見る作業が今日要請されている」（320）と主張している。また、筆者は最後に「大切な問題は、われわれは今、『大塚史学』から、いったいどのような社会科学的な問題意識・研究内容を継承し、検討しようとするのか、ではないでしょうか」（371）と述べ、自身が今まで分析してきた無教会の思想史的展開のなかに自分も参与していることを暗示している。過去の歴史に参与しながら未来に向かっていくという創造的な課題が最後に提示され、それについての筆者自身の考えが、断片的にはあるが、示される形で本書は締め

られているのである。

以上、かなり貧相な部分的要約ではあるが、本書の概観を試みた。以下では、評者の私見をいくつか述べてみよう。

- I. 本書の特徴は、第一に、ウェーバーやトレルチ、ティリッヒの枠組みを使いつつ内村の政治思想を分析してその優れたところと限界のあるところとの双方を示していることであり、次に、無教会の精神史を一つの問題群をめぐる思想史として描き出していることである。類型とは歴史上の個別具体的な事実と何らかの普遍的な思考との間にあって両者を媒介するものであるが、本書によって上記の社会学的な類型論が無教会の政治思想を分析する上で有効であることが提示された。このことは、無教会という個別具体的な歴史現象が、社会とキリスト教とについて何らかの普遍的・思想的な意味をもつものとして考えられることを意味する。実際、さまざまな無教会キリスト者の思想と歴史とが結合して一つの問題をめぐる思想史として描き出されている点に本書の大きな意義とがある。キリスト教と西欧の様々な政治思想と日本の近代化といった複数の文脈が出会って合流し、国家と宗教、近代化とキリスト教といった問題をめぐって思索がさまざまなヴァリエーションの思想を生み出しながら展開されていく姿が描かれている。そして最後に、大塚史学の継承という問題提起をすることで、筆者自身がこの展開のなかに参与していく姿が示される。いわば、過去と向き合うことで現在にとっても有意義な叡智を汲み取って未来につなげていくという思想史研究の真骨頂が発揮されているのである。
- II. また、これは評者が本書を読む中で副産物として得たものであるが、学者の学問的著作をその学者の思想として読むにはどうすればいいかという問題に関して、本書は一つの解決法を提示しているように思われる。無教会の場合、知的学問的な側面が当初から強くあるが、世代を経る度にそれが強くなっていき、第三世代ともなると、多くの主要な人物が学者になっているという事情がある。したがって、学者としての価値自由な認識姿勢の下で書かれた彼らの著作と無教会キリスト者としての彼らの思想との関係をどのように考えるかという問題が生じる。この無教会研究上の方法論的問題について、本書は明確な解答は示していないものの、内村からの問題意識の継承と発展というモデルを提示したことで、一つの示唆を与えてくれる本だとも評価できるだろう。
- III. その上で気になることが二点ある。一つは、煩瑣な問題に見えるかもしれないが、資料の問題である。本文中でも述べたが、本書の内村に関する論述においては、晩年の内村の列王記の講義が重要な役割を占めている。しかし、この資料は、本文中でも説明されているが（72）、内村自身が校正して発表したテキストではないし、全集にも収録されていない。弟子八木一男が講義を筆記した原稿であり、内村の死後、斎藤宗次郎が編集者をつとめる雑誌に掲載されたものである。となると、この

テキストを内村自身の思想を表すものとして扱うことに対しては、文献学的に慎重でなくてはならない。むろん、弟子の筆記だから無価値だということにはならない。むしろ、未発表の原稿にこそ内村の思想が率直に語られていることも十二分に考えられるからである。この文献学的課題を解決するためには、なぜ内村はこのテキストを生前、発表しなかったのか、またなぜ斎藤は内村の死後に発表したのか、という二つの問いに答える必要がある。その上で、本テキストのもつ意義が判断されるべきであろう。

- IV. もう一つの問題点は、内村からの問題意識であるところのキリスト教とネーション形成の問題に関連して、現代において内村、南原、矢内原、大塚から何を継承するのかという問題である。確かに、筆者は大塚について述べた第六章において「『ネーション・メイキング』と戦後世界」と題して、大塚が発展途上国の国民経済の問題を扱ったことを取り上げ、「この問題に関する先生の理論的洞察は、その後の歴史の推移（『冷戦』終結以後の、すべてを呑み尽くす市場経済のグローバリゼーションの進展）にもかかわらず、今日でも、むしろ今日こそ、『繁栄』と、その足元での『二重の貧しさ』との両極化の問題を見すえる、大変アクチュアルな問題を提起しているのではないのでしょうか。」（368）と簡単に述べているが、これはもっと説明を要するのではなかろうか。というのも、昨今では大塚と時とは状況が大きく変化し、まさにグローバリゼーションの問題がクローズアップされることが多く、この簡潔な論述だけでは疑問に思う人も多いはずだからである。むろん、これは、グローバリゼーションによってネーションの問題が解決するなどという安易な意見に評者が与することではない。むしろ逆である。評者の私見を開陳すると、それだからこそ逆に、単純な肯定でも否定でもない形でネーションの再考が必要になるはずであり、無教会の政治思想は、それこそ筆者がここで述べているような「アクチュアルな問題」を提起することになるだろう。「『沈められたものの向上、自主独立なるものの平和的結合』への希望」（371）という、福音のエートスがもたらした「思索の原型」（371）が現在ではどんな姿をとるのか、評者にとっては興味のつきない問題である。

- V. また、本書を読んだ上で改めて気になるのは、なぜ内村はさまざまな思想を、矛盾対立を孕んだまま同時に抱くことができたかということである。本書が明らかにしたように、内村は矛盾対立を孕んだままの状態にあって、反近代的な思想を抱きながらも同時に近代的な政治思想の価値を認めることができるぐらいに柔軟な発想をとることができた。それは何故か。また、弟子たちはこのような矛盾対立や柔軟さを継承されることができたのだろうか。よくよく考えてみると、無教会キリスト教の基盤である聖書自体が複数の文書からなる書物であり、またキリスト教自体が歴史的には多面体のような存在であるということが絡んでいるように思われる。一例をあげるなら、聖書は王権をどのように見ているかという問いを立てる

と、王国は神の意志にそった制度だという立場をとるテキストと神の意志に反する制度だという立場をとるテキストとをすぐに見出すことができる。どちらの聖書テキストに依拠するかによって、解釈者の主張が変わってくることはすぐに想定することができる。無教会的な聖書中心のキリスト教信仰とアングロサクソン由来の近代的な思想との関係に関しても、確かに、両者はピューリタンのエートスを介してつながっているが、しかし、内村自身が列王記を用いてアジア的な保守的思想を展開していることから分かるように、必ずしも一致するわけではない。矛盾対立を孕んだまま分裂しているのである。内村はこのような文書群を用いて思想や信仰を形成し、伝道活動を行っていた。ならば、この問題は結局内村が聖書というものをどのように捉え、また実践的にはどのように使っていたかという問題に帰着するように評者には思われる。ひとつの問題に関する複眼的な思考をどのように実践していたかという問題である。これは政治思想の範疇を超える問題ではあるが、無教会が聖書を基にして信仰や思想を形成する立場にある以上、弟子の世代であって避けられない問題であろう。どのような継承と発展が行われたのか、気になるところである。

- VI. あと最後に蛇足ながら付け加えておくべきことは編集と校正の問題であろう。これは本田逸夫氏が『本のひろば』（2016年6月1日発行）で発表した本書の書評でも指摘していることである。本書は形式的には、筆者が今まで発表してきた論文や発表資料を一冊の本にまとめたという体裁をとっている。そのためか、本文中に論旨が重複している箇所が少し目立つ。索引もついていない。また、冒頭に序論的な記述がないため、個々の章の記述や論旨はわかりやすいものの、全体像が少し見えにくい。一応、注やあとがきのなかに全体の輪郭の部分的な説明が見られるが、ならば冒頭に序を設けて全体の構成や枠組みをあらかじめ明らかにしておいて方がよかったのではないか。内容が優れている分、これはもったいないように評者には感じられた。

以上、ないものねだりのような私見の開陳になってしまったが、あくまで評者の関心からのコメントであり、本書から学べることは上記以外にもまだまだ多くあることを記しておきたい。内村鑑三、南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄のテキストを思想的にも歴史的にも丹念に読み解いた本書は「無教会における国家と宗教」を考える上で重要な洞察を与えてくれる本である。

(わたなべ・かずたか NCC宗教研究所研究員)